

セット經由エラブガへ

入ソ日時

昭和二十年十月一日

復員日時

昭和二十二年十一月二十五日 舞鶴

復員後の職業

紀陽銀行（五十五歳）、和歌山信用金

庫（六十六歳）

現況

退職後、八十歳、現在に至る

【執筆者の紹介】

三十年前に柴田氏が復員し、紀陽銀行を定年退職後に出向勤務していた和歌山信用金庫での「庫内報」として記述したものであるという事で、それを参考にしていま一度執筆してもらえないかと願ったのであるが、今改めて書くということは、老齡八十歳の彼としては、意を満たすだけの記述は無理であるとして本人からの申し出がありましたので、その実録をお借りできないかとお願ひしたところ、快く拝借することができました。その記録文の部厚い綴りを読みゆくうちに、柴田氏が昭和二十二年末ごろにナホトカにおいて帰還船への乗船ひと時前に、ソ連収容二年間の貴重な記録・

日誌等を廃棄処分に行っているにもかかわらず、よくもこれほどに正確な記憶と、その時その場所における綿密な観察力にただただ驚かされるばかりである。私自身の三年間の苦悩の体験をそのままに呼び起こされる一ページにつき千五百文字、百七十一ページに及ぶ大作であり、労作であるこの記述をこのままに埋もれさせておくことはできないと私は考えた。

この私たちの尊い昭和時代の歴史の一端を残すための一助とするため、是非とも彼、柴田氏の記録を縮小してでも主要部分を残すことに留意、書写代筆して書き上げることを決意したものである。

（和歌山県 橋本 義治）

誰か祖国を思わざる

和歌山県 北村 明

まえがき

ソ連領ナホトカから舞鶴に上陸したのは一九四七年

十一月十九日、何年ぶりに見る憧れの祖国、明るい平和そうな美しい海岸風景、外地から内地の港にたどり着いた。この時ほど私の心を打つたものはない。「お帰りなさい。ご苦労さまでした」復員局の人々の棧橋での声に、目頭に熱さを覚え胸がこみ上げてきた。今こそ父母、妹弟や友人、故郷の人々と会えるぞと、激しい気持ちの渦の中に別の気持ちがゆったり、底力をもって動いた。

国際的にも個人的にも、隣を知ることとは決定的に大切なことである。従来外交官ですら、列車に乗ればカーテンを下ろされ、町を行けば尾行がついた。たまたま自由が許されれば宣伝策が加味されていた。そして、謎の国としてソ連は終始したのである。欧露における体験と記憶はぜひとも記録に残しておきたいという気持ちからこの文をつづることにいたしました。

遼陽から海城へ

一九四五年（昭和二十年）九月二十日、私たちは突然出発の命令を受けた。車なき我々は、各々重い荷物

を背負って歩かなければならなかった。だが、唯一の食糧である米俵だけは担いで歩くわけにはいかない。大八車のような輜重車に三十人分の共有する米、わずかに六俵でも、これだけあればしばらく食える。

一万人の列は、長蛇のごとく歩き続けた。遼陽から海城へ三日から四日は十分かかる。今考えただけでも、うんざりする行軍であった。それもソ連軍からの命令であれば、歩かなければならなかった。

鞍山にて野営、翌日朝五時出発、また歩き続けた。途中、湯崗子の山の中で毛布にくるまった。我々は疲れ切っている。腰を下ろせば、すぐこくりこくりと眠ってしまう。また歩く、長い長い列も切れ切れとなつてしまった。落伍していく者もある。幸い私の引率する部下には落伍する者はなく歩いた。出発して三日目の夜、雨となり、ずぶ濡れになって歩く。

町の明かりが見え始めた。あれが海城であろう。大雨の中、ぬかるみ道を進んだ。腰まで水に浸った車がたびたび目についた。道路が悪い。

目的地に着いたのは午前四時、真っ暗闇のとばりに

閉じ込められていた。

二十三日の日は多忙であつた。決められた宿舎の準備・整理・被服の手入れなど、そのほか命令受領等々で、私は自分のことは全く何もできなかった。

兵隊たちとの別離

私は、旧中隊員三十名と共に暮らしていた。

各部隊も旧軍隊編制のままであつた。海城へ来て一カ月近くたったある日、命令で旧部隊と離れ将校集団の中に入れられた。今まで仲良く一族のように暮らしてきたのに、親しい兵士たちと別れるのが辛かつた。

「会話は別れの始め」とか、ソ連側からの言いなりの別れである。これも運命というものであろう。幸い宿舎も近いので互いに往復できた。

他の部隊も海城に集結

五日目ごろくらいに各種部隊が海城に到着し、当時一万五、六千の大多数になつたと聞く。

そのころ問題のあつたのは看護婦や師範学校の女生徒たち、頭髮を短く切り、軍帽と軍服姿に変身した女性集団も七百名ばかり到着した。そのころの風の便

りに、ここ海城に集結して大連から内地への引揚げが開始されるのだという話が、どこからともなく伝わってきた。また一方では、きつとシベリアへ引つ張つて行かれるという話もしきりであり、はつきりしたことはわからなかつた。

そのころ、ここ南満も十月下旬の風が吹き寒さが身にしみる。山も野も黄色くなつてきた。この分では越冬の準備も必要である。防寒被服の準備も忙しい。

ソ連軍兵士を欺くために男装はしているものの、隠しても隠しきれない女性タイプ、敗戦の日本のかわいそうで哀れな乙女たち。夜は彼女たちをソ連兵の被害から防護するために、二人一組で不寝番勤務につくことにした。幸いにまだ帯刀を許されていたので、これを頼りにされてのことであるとはいえ、相手は飛び道具、自動短銃を持っているソ連兵だから、我々自身頼りないことこの上もない次第である。しかし、不寝番をするようになってからは婦女子のソ連兵による被害もなくなつたことは、今さらながら当時の措置としてよいことであつたと思ひ返している。

出 発

十一月になって間もなく千人単位の集団となって出発し始めた。どこへ行くのか、もちろん何もわからない。多くの糧秣を貨車に積み込むという話は聞いた。毎日のように各部隊は出発して行つた。不安な気持ちの連続であつた。

ある日、旧部隊の兵である石川君が別れに来てくれた。「一足先に帰ります。小隊長殿も気をつけて元気に帰つて来てください」と嬉しそうに出ていった。帰れることを信じていたのだろうが、私はソ連は絶対に彼らを帰すものではないと思つた。その時、涙をこらえて、何も知らずに去り行く石川君を見送るよりなかつた。

十一月十一日、兵隊たちの集団も出て行つてしまつた。一万五千人もの人間を掃き出した大きな宿舎はがらんとしていた。我々と女性集団だけが残された。二、三日してからであつたか、我々集団にも出発命令がおりた。五十日分の糧秣を積んでいくということを聞いて驚いた。

貨車を二段装置にして、その中に詰め込まれた。ストーブを中心にして荷物と人でいっぱいであつた。身動きもできないくらいのもまで列車は動き出した。ひたすら北へ北へ向かつていたようであつた。

窓もなく外を見ることは全然できない。支給された旧軍隊の防寒外套と防寒帽が唯一の寒気から救つてくれる被服であつた。

異郷の風は虜囚の身には冷たく、荒寥たる北滿の野を山を列車は走る。満州里を通過し、満州とソ連領シベリアの国境近くの駅、アトポールで我々は列車を乗りかえた。「CCCP」という文字とハンマーを組み合わせたソ連鉄道省のマークのついた木造の粗末な貨車が五十両ほどあつたらうか、私はその中の一つに詰め込まれた。

ソ連へ

列車は走る、走る、夜中にチタでちよつと止まつたがすぐに動き出した。いつバイカル湖を通つたのかも知らない。外が見えないのでさっぱり何もわからないのです。イルクーツクを出て列車はクウイヴシエフに

向かっていた。乗車して以来初めてこのクウィヴシエフで入浴ができた。日本の浴場と違ってシャワー式のもので、湯と水とが頭の上から如露じようろの水のように落ちてくる。素早く全身を洗い、また車中の人となった。ウラル山脈もいつの間にか通過していたらしい。そしてペンザから南下を始めていた。一九四五年（昭和二十年）十二月十六日、列車は止まった。はるか先の方に駅があるらしい。またちよつとした町も見える。板には「モルシャンスク」(M A P Y C A N C Y K)と白いペンキで書いてあるのが見えた。

収容所

リュックサック、装具等々、雪の深く積もった車外に放り出された。すっかり暗くなった町を出て収容所へ行軍である。途中、私たちの荷物を盗みに来る市民の多いのにあきれた。ソリの上の荷物をねらって追いついても逃げようもしない。やむなく軍刀を抜いておどしてやつと列から離れるが、また来る。そのような中を行進した。ソ連軍将校が我々を護衛するためであろうか、たびたび発射するピストルの音が聞こえた。

やつと約七十キロの行程をあえぎながら雪道を歩き続けて収容所に到着することができた。その営門で身につけていた軍刀をソ連側に手渡し、一人一人数えられて中に入った。

将校は武装解除後も一振りの軍刀所持だけは許されていたわけであるが……。

真つ暗な部屋の中に入れられて横になった。いつしか眠ってしまったらしい、長い長い旅ですっかり疲れ切っていたのである。

ストーブはドイツ人によつてたかれていたとのこと、部屋の中は暖かった。目の覚めたときは明るく太陽が輝いていた。大きな樽（ボーチカ）に入れられて朝飯が運ばれた。牛乳入りの「かゆ」（カーシャ）である。真つ白な米のかゆ、久しぶりにうまいものを口にした。飯ごとに一杯あてだからすっかり満腹してしまった。

これは、日本人は米を食べなければ生きてゆけないとのみ込んでいるソ連側の収容所長の考えから、以前から収容されているドイツ人に牛乳入りの「飯のか

ゆ」で、どちらとも言えないものを作らせたのだとのことであつた。間もなく、一人当たり三百五十グラムあての白パンが分配された。そのときは、非常に待遇のよいのに驚いた。この分では疲れ切つた体の回復も早く以前のような元気になれそうに思えた。加えて今夜は入浴である。ドイツ人がつくつたという半土窟式の建物が浴場で、私たちは汚い被服を鉄の輪に通した。大きな火熱滅菌庫に入れて、それを消毒した。次に私たちは一列に並んで浴場内の理髪所に入つた。ハンガリー人の理髪師がいて頭髮を全部刈り、顔のひげも美しくそつてくれた。この日は入浴はなかつた。

私たちの収容所は、建物すべて木造で、四間×二十間という大きさのもので、所内には五十軒余りと、ほかに診療室、病室もあつた。そしてすべて建物は白ペンキ塗りされていて美しく整然と並んでいた。それに劇場も運動場もあつた。また大きな池があり、川幅約五メートルぐらいの小川がその池に流れ込んでいたし、河口には木の橋がかけられていて周囲には松林があり、はるか向こうには白い塔がそびえて、この池の水にそ

の影を映していた。ソ連領内にもこのような美しい場所があるのかと思つたものである。

そのような環境の中でも、後統部隊が後から続くこの収容所の毎日であり、入つて来るだれもかれもが黒ずんだ顔で、敗戦日本軍の現実の姿がこの収容所にあつた。

ソ連側の命令で、私たちは絶えず部屋の中を清潔にしておかねばならなかつた。看護婦は毎日宿舎を巡察して虱の検査を日課として、厳しく取り締まっていた。そんなことでも、戦争に負けたという実感のないまま武装解除を受けて、疲労こんぱいし切つた肉体と傷つけられた精神はなかなか回復しそうになかつたけれども、心の刺激となつて巡察時のひとときを待つたものである。しかしソ連側は私たちの心境などには一切おかないなしに、毎日の作業は割り当てられ、私は川岸の材木運搬に行かなければならない。自活という名目の薪割りのことを含めての作業であつた。

営門を出るときは必ず五列の縦隊に並ばされる。幾人ものソ連側の係員が我々の作業人数を数えた。それ

に要する時間の浪費は、私たちの常識では想像もできないことであつて、詰まるところ、当時のソ連人一般の教育程度が最低状態であつたことの証明であると言つてもはばからないものであると私は思った。収容所では朝夕の点呼は必ず行われた。冬の太陽は西から出て西に沈むと思われるほど急ぎ足で過ぎ去つてゆく。

十二月末の寒さは手を凍らせ、点呼のための鐘が鳴つて私たちが戸外に列をつくり、ソ連側の日直を待つ三十分以上の時間はたまらなかつた。彼らには、自身自身の知識能力の不足が、他の多くの人々にいかに迷惑をかけているかということを見ることができ、ない教育課程の人間どもであるということを感じ知らされたものである。

夜の点呼が終わるとあとは寝るだけであつたが……。この収容所に来て次第に気づいたことは、各種の国の人々が収容されていることであつた。彼らは、ロシア語で「カマラード、シガレット、イエスチ」（戦友、たばこありますか）なんて言つて私たちに話しかけてくるのであつた。ドイツ人、ハンガリー人、オーストリ

ア人、チェコ人、ポーランド人、ルーマニア人、日本人以外にこんなに多くの国々の俘虜たちが収容されていることを知つた。汚い外套の破れた袖から出た毛深い、やせた黒い手が彼らのさびしさを物語つていて、この収容所での長い生活を想像させられたものである。

春、春来たれども

北欧にも春の息吹が感ぜられてきた。私たちは解氷期に宿舎への浸水を防ぐために除雪をしなければならなかつた。また薪の準備は必要欠くことのできないこともあつた。これはまた冬を迎えるための準備であるとも言える。今は毎日、木製の雪除け具を持つて作業を続けた。

やがてここにも春が来た。雪が溶けて野の草は芽を出し始め、樹々も若芽を吹き出した。松の緑も色濃く美しくなつてきた。解氷と解雪期となつて、あたりは水、水、水で、収容所を巡る四囲は全く湖のごとくになつて交通は全然できない。このために我々の食生活にも大きな影響が出てきた。春の気配は喜びであつたが、雪解け氷の大自然の脅威にはお手上げで、特に十

日余りも続いた馬鈴薯ばかりの食事には文句の持つて行き先がなくて、情けなく腹立たしいことであつた。

五月一日のメーデーの少し前のある日であつた。私たちは急に舎外に整列させられた。宿舎内には一物も残してはならないというソ連側の命令であつた。やがてソ連側の将校や兵士が来て所持品検査が始まつた。

刃物類や小さな手製の物に至るまで没収された。そして珍しい物は文句なしに全部取り上げられたと言つてもよい。ともかく彼らは私たちの持ち物すべてに興味があるらしい態度で調査に終始したが、本当の目的がいずれにあつたのか、私には理解できなかった。後から知つたことであるが、五月一日のメーデー前には必ず検査があるということを、ドイツ人らの話で聞くことができた。

収容所のスポーツとリクリエーション

ある日、所内で国際陸上競技が行われた。走り高跳び、走り幅跳び等々競技の中で、二百メートル競争で日本が一位、他の競技もそれぞれよい成績で活躍して、思わずみんなで氣勢を上げたものです。夜は国際音楽

コンクールが開催された。だれであつたかは知らない。どうしてこの収容所でヴァイオリンで「蒼きドナウ」の曲を演奏され、私たちに聞かせてくれたのだろうか。私たちが思い思いに芝生に寝そべつて虜囚の身であることを忘れたひとときであつた。

時過ぎて向こうの松林のほとりから尺八の音が流れてきた。これもだれであつたかは知らない。日本音楽独特の哀調を帯びた尺八の音を耳にしたときの私の心は、すべての何物をも忘れてしまう感激を覚え、今の苦勞を休ませるものであることを体験した。このときの二人の演奏者に改めて感謝の意を送るものです。

農場（コルホーズ）

五月十五日、収容所を隔たること約三十キロの農場（コルホーズ）に派遣される身となつた。

肥沃な七百ヘクタールに及ぶ黒土をこの農場は持つていた。コルホーズでの作業規定は八時間労働であるが、植えつけ期と収穫期とは別であつて夜間作業もあつた。

その日の作業量（ノルマ）を毎朝点呼のときに農業

技師（アグラム）から達せられた。この地における農業経営の絶対的権利は彼「アグラム」が持っていた。

五百人の中に混じって一緒に作業していた私たち二十名は「アグラム」の命令によって馬耕をやることになった。車輪つきの大きな農具（ブラウ）に二頭の馬を仕立てて、この果てしなき大原野を耕してゆくのである。機械の使い方も短時間で習得して、私たち日本人二十人のみが五十日余りを、朝幕舎を出て夕方まで全く監視されることもなく解放された人間として自由に農耕作業に従事した。

このことは今にして思えば、ありがたい生きる喜びの体験であつたと思う。近くの部落で村の娘たちがかん高い声で歌っているのが聞こえてくる。このときなどは抑留者としての現実を忘れたひとときであつたと言えよう。ある日の昼休みに、馬に乗って部落に行ったこともある。かわいい娘からリングをもらつたこともあつた。いわば若い青年時代の思い出のひとつとして私の脳裏に残るものである。これは淡い恋心であつたのかもしれない。

七月になつて間もなく私は農場長からトラクターの方へかわるようになつて、その翌日から作業に出たが、使つたことのないトラクターである。二日間、ドイツ人の助手をやり練習をした。ドイツ人は非常に親切に操縦及び使用法を教えてくれて、その要領を会得することができて、三日目からは単独で操作するようになった。大きなトラクターを操縦して、広々とした大地を何もかも忘れて一生懸命操縦桿を握つていた。真つ黒で肥沃な土が、もくりもくりと耕されていく。これは大陸ならではの大きな大農法というものだろう。機械化農業の實際を私は体験したことになる。私が耕して行く後からドイツ人がトラクターで碎土機を引っ張つてついて来る。広い広い原野を二台のトラクターがエンジンの音高く響かせながら活動しているのだ。何とも言えない気持ちであつた。遠くに見える部落には大きな風車が回つていた。夕日は西に傾く。私たちはトラクターを天幕の中に入れて、オートバイを走らせて皆の待つてゐる幕舎に帰るのである。

「セボードニヤ、ノルマ、カンチャイダ」（きょう

はノルマ終わりましたか」と馬鈴薯畑から帰る女たちから呼びかけられる。「ええ、終わつたよ、きょうは一二〇パーセントだよ」と、そんな会話が私たちとの間に交わされる。すっかりロシア語がうまくなつてしまった。トラクターによる広野の耕作は終わり、私は「ナチャリニック」の命令で馬の飼いつけに回された。私ほどあれからこれへ、これからあれへと仕事をやらされた者はいないだろう。九州出身で私と同期の山口君も、トラクターから豚飼いに回されていた。

馬の飼いつけとは、馬を厩舎から出して放牧するのである。三十頭の馬をあちらこちらと放ち草を食わす仕事であるが、昼の勤務はよいが夜間は辛い。昼は一頭の馬に乗って他の馬を監視していればよいのだが、夜は馬も眠るので、そのいびきに誘われて眠くなり、つい干草の上で横になり寝てしまった。その間に放馬されて、それを探すのに一苦労したこともあった。九月も終わりに近づくころになると、夜の冷え込みが驚くほど厳しくて、夜間勤務がたたったのか発熱して四〇度までになっていた。ソ連側の女軍医の診察ですぐ

に収容所に帰れということになったと日本軍医に伝えられたが、迎えに来るはずの自動車がなかなか来なかった。日本軍医の看護でその夜を明かし、翌十月一日トラックに乗せられて、久しく見なかった懐かしく思われるモルシヤンスクの収容所に帰ったのである。約五カ月間の間にすっかりきれいにされたラーゲルの宿舎は、天幕生活から文化生活の国に帰つたように思えた。ラーゲルのドクトルの手厚いもてなしを受けて即時入室することになった。

入室

私の体は熱があるために入院はしたが、ほかにどこも悪いとは思わなかったけれども、ソ連側は熱ということとなると大いに注意して、軍医も看護婦も患者を非常に大事に扱う習性があるようである。それは本質的に医学的な解釈からのことか、私は知らない。私にとっては好都合なことにように思えた。

入室二日目に耳の下が少し腫れてきた。診察の結果は耳下腺炎ということで処理されたようであるが、熱が下がって一週間目に、右足のすねに痛みが出て困っ

た。日本の軍医は急性関節炎だと言った。あるいはリユーマチかもしれない。検査の設備や方法もないのははっきりしたことは言えないが、とにかく「ダルソ―」とかいう日本製の薬をくれた。その薬を毎日続けて飲んだが、膝が少し腫れてきて痛みもすぐには取れなかった。痛くても動かさなくてはだめだと軍医に教えられ関節の運動を軽く続けた。日本軍医少佐（ヤポンスキー・ドクトル・マイオール）いわく、「コルホーズでの作業は無理であつたのだよ、結局の話は耳下腺炎、そしてリユーマチになつたのは、喉から菌が入つたことが原因である」とのことであつた。また焦つても治らないから、ゆつくり休養して体力をつければ、若いのだからそのうちに治るだろうと養生方法を教えてくれた。そのことに加えて、ソ連側の軍医からの退室命令がない限りはゆつくり遊ぶことだよと親切に言ってくれた。

OK中隊

十一月二十日、私は退室することになった。

ドクトル・マイオールの行為でOK中隊に入ること

になった。OK中隊とは保育錬成中隊と言って、主として身体検査の結果OKになった人々及び退室者を入れて作業につかせない中隊という意味であつた。だからOK級と言えば年老いた人が多い。一番の年上は六十歳ぐらいかなと思われるようなおじいさんもいる。旧大佐、中佐、少佐らの佐官級連中、それに若干の病氣上がりの者といった程度の尉官たち、百三十名ほどいた。

作業がないので至つて退屈である。天気の良い日は外に出て散歩する。もちろん、防寒外套、防寒帽は着用して身を守り、ゆつくり歩くのです。また、このころともなれば寒気が厳しいために室内で遊ぶことが多くなつた。囲碁、マージャンが盛んであつた。年寄りの中には有段者もいて熱心なものである。私はこんな人々の中に混じつて暮らすのがなんとなく嫌になつた。もつと血氣あふれる青年たちの中で生活したいと思つてもいたし方がなかつた。毎日の退屈にもう飽き飽きして図書室の書物を借りて読んだりもしたが、もう読む本もなくなつたので仕方なしに碁でもやろうかとい

う気持ちになって教えてもらうことにした。元大佐の人が一生懸命に私を初めから、初歩の基本から正しい囲碁のあり方を教えてくれた。

在ソ第二年目の正月が訪れた。昭和二十二年一月一日である。この日のみ、ラーゲルの休養の一日が与えられた。収容所内全員のラボートのない日である。

再びの春来たれども心の春とならず

そのころ、急に糧秣の配給量が減らされた。三度の毎食とも水のようなスープをすすまなければならなかった。パンも二百五十グラムになった。飢えと寒さを私たちは痛切に感じなければならぬ毎日である。そのころ私はOK中隊を出て収容所内消防隊員として勤務していた。私たちは何度も収容所長に糧食の増配を要求したが、彼はいつも聞き流すだけで減量の事由すら述べない。私は食べる物も与えず労働を強いる所長に憎しみを覚えた。消防隊員の任務は火の取り締まり、火災予防で、所内の規定以外の所で火を焚くことを注意するのである。消防機具としては手押し消防ポンプ、水囊、トビ、はしごなどで日本の機具とよく似ていた。

仕事は主として外人相手のことが多くあったのでおもしろみがあった。消防演習もたびたびやった。その都度「動作が機敏でよろしい」とソ連のナチャリニツクは講評した。

そのころ、プラウダ紙の報ずるところによれば、ソビエト政府とアメリカ政府との間に協定ができて在ソ日本人の日本への送還を開始することになり、既に十萬五千人が帰還しているとのことであつた。そのうちに我々にも順番が来るだろうと心待ちにしているのであるが、再びの春は来たけれども、喜びの便り、音信はなかった。

ソ連の宣伝

民主主義研究機関である「友の会」が発足して、二名のロスキー政治部将校の指導のもとに機構の拡充強化がなされた。会は本部要員「アンチ・ファシスト・スタリシ」・宣伝部長・労働部長・文化部長・内務部長などをつくり、日本人全員が強制的に会員にされた。

「天皇制打倒」「スターリン万歳」「真の民主主義、共産主義万歳」「打倒、ファッショ帝国主義」「日ソ親

「善」などという文句が至るところにデカデカと書き立てられ掲示された。新聞はハバロフスクで発行されていた。日本新聞があつた。これは別名「デマ新聞」と呼ばれていた。抑留日本人に対する赤化手段として右のほか、会本部での講習・総会・研究会等があつた。これらひつくるめての結論は次のようである。

一、反〇熱の高揚。

一、親ソ分子の培養増大。

一、日本本土の赤化のための闘争分子の養成。

一、日本本土のソ連圏編入。

こういう目的のために手をかえ品をかえて、もつともらしく私たちの脳裏へ工作の矢がひっきりなしに放たれ続けたのである。

特にある国に対しては、国際問題を通じて徹底的に反感を持たせるように考慮が払われていたようである。例えば、ソ連としては一日も早く一人でも多く日本人を帰したいのだが、マツカーサー司令部と日本反動政府は、おまえたちを過剰人口として扱い、すこぶる冷淡で、ソ連側から配船を要求しても彼らは受けつけよ

うともせず、全然船をよこそうともしないから、おまえたちを帰そうとしても帰せないのだと言う。

こんな調子であらゆるニュース、あらゆる事象を歪めて宣伝した。しかし、宣伝というものは恐ろしいもので、他の批判材料のないときは、それはデマだと思ひながらも、いつの間にか、その虜となる可能性がある。半年ばかりの間に赤化されて半赤ないし赤がふえてきた。中には、もう日本へは帰りたくないなどと言ひ出す者もあらわれた。「日本反動政府はソ連領内にいる日本人を過剰人口として快く受け入れ体制を整えようとしなさい」と繰り返し繰り返し宣伝するのがソ連側であつた。このようなことが続けられるうちに、「かくなる上は、ソ連と固い握手のもとに日本共産主義革命以外にない」などと氣勢を上げる連中などもあらわれ始めた。反動分子は遠慮なく摘発するとして、ソ連側の命令だとのおどし文句の前にはみんな一本参った。なぜなら、彼らに盾突いたら帰国のことが左右されて、ひどく後回しにされてしまう恐れがあるからである。ただの宣伝なら振り向く者は少なかったであ

ろうが、「帰さぬ」と言うのだから始末が悪い。皆、猫をかぶっているより道なしというわけである。

モルシャンスク市

「モルシャンスク」という街の名は何という意味かは知らないが、私がいたころの人口は約十八万ということであった。ロシアでも相当に古い街である。場所はモスクワから東南方三百キロの地ということである。在ソ二年で街の様子も大分変わったとのことで、貧しい街もこのころでは少しきれいになったとのこと。高い昔の教会の塔の影を湖に映し、大きな風車がゆっくり回る。その下を牛がのんきそうに遊んでいる。この郊外の風景は何とも言えず目を楽しませてくれたが、街中の様子はいまだに知らない私たちであった。

兵・下士官らの帰国、はるかなる祖国へ

いつしか夏が終わり、やがて秋が近づいた。このころ、また盛んに民主運動がやかましく叫ばれ始めた。私たちが越冬準備に忙しい毎日であったときである。突然、これまでのラーゲルから外へ派遣されていた作業隊の兵士たちに引揚げ命令が出て、この収容所に集

結することになった。九月二日のことであった。だが、いつもだまされてばかりきた下士官や兵士たちは、だれも「ダモイ」（帰国）のための集結でないと思っあきらめているようであったが、ついに九月二十六日の十二時に命令が出た。いよいよ彼らは帰る。「ダモイ」の日が来たのだ。大喜びに沸き立つ声と姿を私は見聞いた。和歌山の同県人で日高郡の中津村船津の高尾元兵長が帰還のあいさつに来てくれた。そのときの彼の私へのあいさつは「一足お先に帰ります。北村さん、体に気をつけてください。私が帰ったらお宅を訪ねて貴殿の無事であることをお知らせいたしますので、私、高尾との関係の証拠となる物をください」とのことで、満州当時の私服の写真を高尾氏に手渡しして、「ダモイ」のあいさつに来てくれたときの言葉として、私は心から彼に「元気に帰れる日、何よりよかったと思う。途中、どうか気をつけてくれるように、そして元気な顔をご両親に見せて上げてください。私たちもそのうち帰れると思っています」と述べて喜びの言葉をした。

以上は「ダモイ」のあいさつに來てくれたときの會話であるが、そのときの感慨は今もあるが、薄れて乏しいものとなつた。彼らは整列して、日本の楽団（バンド）やドイツの楽団（バンド）の伴奏に送られて出發して行つた。彼らの出發して行つた後は、大波の押し寄せ、去つて行つた後の静けさのように、何もなかつたような静けさというか、もの静かな環境になつた。「これで私たちの希望もやつと開けて、彼らが帰つたこの次は我々の番であらう……」と。だが、それはいつの日であらうか。

帰還、一路東進、列車は走る

彼ら下士官、兵士たちの帰還後二十日が過ぎた十月十五日、ついに我々旧將校（ただし尉官のみ）全員帰還準備、十二時集合の命令が出た。ドツと沸き上がる歓声！

それから嚴重な被服、所持品の検査が行われた後、ラーゲルを出てモルシャンスクの駅でダモイ列車の一員となつた。十一月七日、私たちはナホトカに到着した。二十数日の東欧よりのシベリアの旅であつた。入

ソするときの暗たんとした気持ちに夢のようであつた。シベリア鉄道付近沿線で労働する日本人兵士たちの姿をたくさん見た。私たちは手を振つて励ましの声を送つた。

乗船

十一月十六日、いよいよ乗船の日である。沖に碇泊していた船が埠頭に近づいて來た。日本の船だ。甲板の手すりに寄りかかつた白衣の看護婦さんの姿が目についた。私たちはみんな子供のよう喜びに酔つてゐた。船名は「永徳丸」と書かれていた。心わくわく急いで船に乗り込んだ。

やがて我々の船はナホトカの埠頭から離れると同時に、だれからともなくあちこちから歓声が上がリ、万歳の声がどよめいた。間もなく船は少しずつ揺れ始めた。日本海の航海に乗り出したのであらう。

一日二日して、みんなの考えが一変したようである。かぶつていた猫の皮もはぎ捨てて、もう大丈夫、あれほど歌つた「赤旗」の歌や「インターナショナル」の歌などだれ一人歌う者はいない。解放された喜びが心

の底からふつふつとわいてきた。

「島が見えた」『日本だ』はるかかなたであるが島影が見え、夕暮れの薄暗がりの中に灯台の光が輝いていた。翌朝、目が覚めたときは、紅葉して美しい山のある静かな港、「舞鶴」に船は横たわっていた。

埠頭の方からは「誰か故郷を思わざる」の歌がスピーカーを通して聞こえていた。

私たちは今、懐かしい祖国の土に第一歩を踏み入れたのだ。忘れもしない。それは一九四七年（昭和二十二年）十一月十九日の朝であった。

【執筆者の紹介】

生年月日 大正十二年十一月七日生

現住所 和歌山県有田郡田栖川村吉川一、〇二二番

地（現在の湯浅町吉川一、〇二二番地）

家族構成 現在長男夫婦と孫二人と本人夫婦同居

同右 本人出生当時、父母のほか長女一、第二人

の長男

学歴

昭和十一年三月 田栖川村小学校卒業

昭和十六年三月 吉備実業学校卒業

軍歴

昭和十八年六月 徴兵検査 甲種合格

昭和十九年一月二十五日 堺金岡、中部三十一部隊

輜重第四連隊入隊

昭和十九年二月十二日 満州、東安省勃利戦車第

二師団輜重隊に転属

昭和十九年六月十日 幹部候補に採用され寧安

戦車第一師団輜重に転属

昭和二十年一月九日 牡丹江関東輜重兵幹部教

育隊に入隊、同年一月九

日教育終了

見習士官として遼陽第一

〇八師団に転属

同師団、承德へ移駐す

そのころ、北村氏は、平泉に分屯中の第三中隊（自動車隊）付きとして国境近くに分屯している歩兵隊に弾薬、食糧等補給輸送任務に就く。その行動中の八月

七日、錦県に移駐すべく先発して大隊本部と行動を共にする。昭和二十年八月九日、ソ連軍侵攻の情報を聞いた。平泉の後続すべきは第三中隊が錦県に到着せず、そのまま八月十五日、終戦を迎えた。その後遼陽にて武装解除されたが終戦のことを知らさず、兵や一般人たちの秩序を維持しつつ居留民らを助けた。

昭和二十年十月十八日、海城を出発。貨車輸送により満州里を経由して人ソしたようです。

昭和二十二年十一月十九日、復員した。

帰郷後は農業を営み続けて今日に至っているが、この間、農協理事として活躍し、誠実に尽力された功勞は立派であり、また昭和五十三年の中旬頃から旧田栖川村出身のシベリア抑留者十二名により結成された「思い出会」を開催する。また、シベリア抑留中に死没された戦友たちの冥福を祈りつつ十七年間、全抑協運動に協力してきてくれた有能の士であると思います。

(和歌山県 嘉成 一郎)

「生かされて」ダモイ

石川県 餅井 茂

一、渡満・入隊

流れ流れて 落ち行く先は

北はシベリヤ 南はジャバ

いずこの土地を 墓所と定め

いずこの土地の 土に終らん

大正の終わり頃かに流行した「流浪の旅」というこの歌が好きで、よく口ずさみ、シベリアを連想したこともあったが、そのシベリアに、まさか捕虜として四年間も抑留されるとは、神ならぬ身の知るよしもないことだった。

私は昭和十八年一月、満州興農合作社に入社するため渡満し、四月に興安東省喜扎爾旗興農合作社に赴任して、入隊するまでここで経理係、業務係として勤務した。